

周防大島中学校 研修通信 vol.4

的確な生徒理解のために②

今回は、的確な生徒理解のために②ということで、近刊の石井光太『ルポ 誰が国語力を殺すのか』を取り上げたいと思います。石井さんは、ルポライターとして有名な方で、『本当の貧困の話しよう』『教育虐待』など、独自の視点から様々なテーマを取り上げ、たくさんの興味深い作品を世に出しています。貧困問題や少年犯罪にも造詣が深く、なぜ、そのような問題が日本で起こり、拡大しているのか、現場に足を運び、多くの人にインタビュー取材をすることで、生の声を拾い上げ、問題の核心を私たちに突きつけます。

その石井さんは、貧困家庭や少年犯罪の加害者、ヤクザの家庭、ネットカフェ難民、ひきこもり、風俗嬢など、様々な人々を長年取材し、それらに関する書籍を出版してきた経験から、これらの当事者に共通する特徴として、国語力（読解力・表現力・論理的思考力・語彙力）の低さを感じてきました。また、教育虐待やスマホ育児に関する取材の際にインタビューを行った学校関係者が口々に、現代の子どもの国語力の弱まりを嘆くのも気になっていました。そこで、「子どもたちの国語力は本当に失われているのか」というテーマを掲げ、子どもたちの国語力崩壊の実態とそれを取りまく諸問題、解決策について『ルポ 誰が国語力を殺すのか』という本にまとめました。

この本の序章には、小学校で扱う『ごんぎつね』の誤読の話が載っています。『ごんぎつね』には、ぎつねの「ごん」が兵十の母親の葬儀に出くわす場面がありますが、そこでは、兵十の家に村人たちが集まり、葬儀の準備をしています。本文中には「よそいきの着物を着て、腰に手ぬぐいを下げたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きななべの中では、何かぐずぐずに煮ていました。」という記述があります。この場面を取り上げて、教員が子どもたちに「鍋で何を煮ているか」という発問で、グループで話し合わせたところ、その後の発表で、子どもたちからは、ふざけている様子もなく、「兵十の母の死体を消毒している。」「死体を煮て溶かしている。」と回答したそうです。極端な例のようですが、年間50件ほど、全国で教育に関する講演をし、毎月のように学校を訪れ、授業を参観する石井さんは、題材や発問は違いますが、同じような発言を何度も目にしていくようです。この「ごんぎつね」の授業に関して、授業が行われた公立小学校の、国語を専門とする校長のコメントがとても勉強になるので、長いですが、そのまま引用します。

学校は学力を育てる場なので、子供たちが誤読をするのは悪いことではありません。そこで教員に正してもらうことで読解力を高めていけばいい。でも私は、こうした子たちの反応は単なる読み違いではないと考えています。もし『ごんぎつね』の鍋のシーンを、家が食堂を営んでいるとか、喪服を消毒していると読んだのだとしたら、誤読と言えるでしょう。ありえないことではないからです。しかし、母親の死体を煮ているというのは、常識に照らし合わせれば明らかにおかしいとわかるはずで、平気でそう解釈してしまうのは単なる読み違いではありません。こうした子たちに何が欠けているのかといえば、読解力以前の基礎的な能力なのです。登場人物の気持ちを想像する力とか、別の事を結び付けて考える力とか、物語の背景を思い描く力などです。自分の考えを客観視する批判的思考力もそうでしょう。それらの力が不足しているから、常識に照らし合わせればとんでもないような発想をしているのに気づかず、手を挙げて平然と答えられてしまう。読解力の有無で済ましてはいけないことだと思うのです。石井光太『ルポ 誰が国語力を殺すのか』p15より

学校で得る知識って、社会で生きていくための入り口みたいなものですよ、子供たちはその入り口から、自分の言葉でもってたくさんのことを想像したり、悩んだり、表したりすることで生きる力を身につけていきます。それによって人間関係や社会が豊かになっていく。でも、今の子は知識の暗記や正論を述べることだけにとらわれて、そこから自分の言葉で考える、想像する、表現するといったことが苦手なので、国語に限らず、他の教科から日常生活までいろんな誤解が生じ、生きづらさが生まれたり、トラブルになったりしてしまうのです。言ってしまうと、子供たちの中で言葉が失われている状態なのです。

石井光太『ルポ 誰が国語力を殺すのか』p20より

「言葉の喪失」という問題は、とても根が深い問題で、私自身も年々そのような生徒と接する機会が増えていくように感じます。二言目には「死ぬ」「消えろ」「殺す」「ウザイ」と言う生徒、「何で学校に来れないかわからない。」と訴える令和型不登校の生徒などが代表的です。この本は、そのような生徒たちの背景を丹念に探り、その解決策を見出す労作です。ぜひ、手にとって読んでいただきたい内容になっています

学習の成績が悪い、非行や暴力を行ってしまう生徒の背景には、発達障害、愛着障害、行為障害などの精神障害、家庭環境、現環境など様々な要因が挙げられます。この本は、さらに「言葉の喪失」や、それと関連する「想像力の欠如」なども含めた、国語力の欠如もその要因になりうることを示唆しています。これらの要因が1つだけでなく、複数絡み合うことで、状況がさらに複雑になってくるのではないかと思います。大変難しいことではありますが、的確な生徒理解を行い、生徒一人ひとりの背景に沿ったサポートが求められています。生徒との日々の関わりや保護者・地域の方との関わりの中で情報を得て共有し、共にサポート策を考えていきましょう。

参考文献 石井光太『ルポ 誰が国語力を殺すのか』文藝春秋 2025年

**『ごんぎつね』の読めない小学生、
交際相手に恐喝されても
被害を認識できない女子生徒…**

子供たちの国語力は本当に失われているのか。
だとしたら一体、誰が、なぜ、国語力を殺したのか
子供たちの国語力を回復させるには、
どのような取り組みが必要なのか。
これから描くのは、日本の子供たちの知られ
ざる内面、そして底辺からトップクラスの
教育現場で行われている国語力再生へ
の飽くなき挑戦だ。 —（「序章」より）

石井光太

**子供たちの言葉を奪う社会の病理と
国語力再生の最前線を描く渾身のルポ！**

著者
最高傑作！

石井光太 SNS / ボイスチャット / ネット
トイじめ / 誹謗中傷 / ゲーム依存
待 / 傷つく脳 / 虐待
不登校 / ヤン
グケアラ / 文部
科学省 / ゆとり教
育 / 教員不足 / 家
庭格差 / 系統主義
教育崩壊 / 成果
主義 / 依存症 / 家
失われた三〇年 文藝春秋

ルポ 誰が国語力を殺すのか